

【読書感想文の部】

※作品内の表現については原文のまま掲載しています。

小学校低学年 最優秀賞

「おなじところちがうところを読んで」

日新小学校 3年 諸石 ひまりさん

わたしは、「おなじところちがうところ」という本を読みました。この本を読んで、いつも学校や家で言われている「みんなちがってみんないい」という言葉の意味がもっとよくわかりました。

わたしは、さいしょに本のだめいを見て「いろいろな人の同じところちがうところが書いてあるのかな。」と思いました。読んでみると、わたしの予そう通りでいろいろな人の同じところと、ちがうところが書いてありました。でも、わたしが思っていた以上にたくさんの人が出てきて、世界中には本当にいろいろな人がいるんだなと思いました。

たとえば、男の子と女の子が二人ともピンク色の物がすきで交かんしていたり、体にしょうがいがあってもみんなと同じようにダンスを楽しんでいたたり、国によってごはんを手で食べる人もいるということなどです。

わたしのまわりでも走るのが速い子、休み時間も教室ですごす子、かみの毛が長い子、好きな色がわたしとはちがう子など、同じクラスでもいろいろな子がいます。わたしと同じところもあるけど、ちがうところがあるからわたしの苦手なことを教えてもらったりして、とてもうれしい気持ちになります。

また、この本を読んで、わたしはふだん男の子らしさや女の子らしさと考えてしまっているのに気づきました。

たとえば出かけたときに、すみっコぐらしの服を着ていた男の子を見ました。わたしは、さいしょ「だれかのおさがりだろうな。」と思いました。でも、もしかしたら、その男の子がすみっコぐらしがすきで、その服を着ていたのかもしれない。

ほかにも学校で、男の子だけど、女の子っぽいえんぴつを持っている子がいたときに、「へんだな。なんでなんだろう。」と思って、つい気になってジロジロ見てしまっていました。

でも、この本を読んでから男の子らしさと女の子らしさは関けいなく、人それぞれ好きな物があるから、その子らしさなんだなと思えるようになりました。

わたしがこの本を読んで気付いたのは、この本にはたくさんの人が出てくるけど、みんなニコニコしているところが同じところだということです。

そして、この本を読んで一番心にのこったことは、「おなじところをみつけあって、なかよくなるのもいいし、ちがうところをみとめあってなかよくなるのもいい。」という言葉です。

わたしはこれからもっとたくさんの人に出会おうと思います。たくさんの人と同じところもちがうところも大すきになってみんなとなかよくしていきたいです。

小学校低学年 優秀賞

「おもいやりのきもち」

第一小学校 1年 ※都合によりお名前の掲載は控えさせていただきます。

ぼくは、なつやすみに「どんなかんじかなあ」というほんをよみました。ひょうしにえがおのとこのこのえがおおきくかかれていて、おもしろそうなほんだとおもいました。おはなしはすこしおずかしくてわからないところもあったので、おしえてもらいながらよみました。

このほんには、ひろくんというおとこのこがでてきます。ひろくんには、めのみえないおともだちやみみがきこえないおともだちなど、いろいろなおともだちがいます。ひろくんは、みえないのがどんなかんじなのか、しばらくめをつぶってすごしてみると、いろいろなおとがたくさんきこえました。きこえないのがどんなかんじかも、みみせんをしてかんがえてみました。そしておともだちのすごいところにきがついたので、おしえてあげます。そんなひろくんもからだがふじゆうでくるまいすにのっているのですが、おともだちがいちにちうごかないですごしてひろくんがどんなかんじなのかかんがえてくれます。このほんは、そのひとになったつもりであいてのきもちをかんがえることはたいせつだとおしえてくれます。

よみはじめたときは、ひろくんもからだがふじゆうとはおもわなかったので、わかったときはおどろきました。それでも、いろいろなおともだちのきもちをかんがえてあげて、いいところをつたえてあげるひろくんはとてもやさしいひとだとおもいました。ほんをよみながらぼくもひろくんとおなじようにめをつぶってみたりみみをふさいでどんなかんじかかんがえてみました。しばらくうごかないですごして見て、ひろくんのきもちもかんがえてみました。すこしわかったような気がします。

このほんをよんで、おもいやりのきもちはとてもたいせつだとおもいました。ぼくも、ひろくんのようにあいてのきもちをかんがえてあげられて、いいところをつたえてあげられるやさしいひとになりたいです。

小学校低学年 優秀賞

「自分らしさはすてきなこと」

中央小学校 3年 多田 唯菜さん

わたしは「ふみきりペンギン」という本を読みました。この本をえらんだのは、この本は「自分らしさ」をみとめていく、やさしい物語だとかだい図書でしようかいされていて、私が大切にしている「ふつう」は気にしないという気持ちとのかさなりを感じたからです。

この本は、6人の小学生とふしぎな動物たちがとうじょうします。それぞれの「ふつう」がすれちがうことで、傷ついたり、がまんをしたり、自信がもてなかったりといったかなしい気持ちになってしまいます。しかし、小学生がふしぎな動物に出会うことをきっかけに、おたがいの「ふつう」をみとめ合うことができます。そして「へびこうえんのへびのべろ」を調べることにワクワクしたり、なかなかおりが出来て、笑顔になったりと、すてきな気持ちになることができる物語です。

わたしがこの本を読んで、強く心にのこたところが二つあります。一つ目は、ななこがみつあみライオンを目にした後に、その事をどうしても話したい相手として、ないている、るりちゃん

の顔がうかんだところです。ななこは、るりちゃんに「いつまでもふしぎな話を信じているのは、ちょっとふつうじゃない」と言って、ヘビ公園に行かなくなりました。でも心の中では、るりちゃんのことを気にかけていたということです。わたしは、ふつうということをおし付けたり、ふつうではないと決めつけてなかま外れにしたりすることは、よくないと思っているので、とても安心したからです。二つ目は、自分の左ききをばかにしてきたそうすけが中にわに入ってきて来たのを見たゆうとが、「いやなことをいうやつとはなかよくできないかもしれない」という自分にとってのふつうをこわして、そうすけに声をかけたところです。自分のふつうをこわして、かえるということができたゆうとは、前向きな気持ちになっていて、ふつうをかえるという想ぞうに感動したからです。

わたしはこの本を読んで、「ふつう」ということも「ふつうじゃない」ということも、自分らしさだと知りました。五わのペンギンは、みんなちがうことを言っていて、人もまったく同じことを考える人はいないと気づきました。自分らしさはみんなちがうのは当たり前で、かぞくやともだちの自分らしさをもっと知りたくなりました。自分らしさを認め合うということは、みんながワクワク生きるために、必ようなことだと思いました。わたしは、自分らしさはとてもすてきなことだと思えるようになった気がします。これからは、ふつうを人におしつけていると気がついた時には、ふつうをかえる自分らしさも、みに付けていきたいと思います。

小学校高学年 最優秀賞

『地球村の子どもたち 途上国から見たSDG's ③平和』をよんで

日新小学校 6年 芝野 茉音さん

朝、ウクライナとロシアの戦争のニュースを見た。戦争が2年以上続いている。この戦争の背景を知って、日本が戦争を始めてしまったらどうしようと不安になった。夜になった。朝のニュースを思い出してとても怖くなった。戦争中の生活はどんなに苦しいのだろうか。

次の日、学校から帰るとお母さんが「これ読んでみ。」と、この本をすすめてきた。あまり乗り気ではなかったけど、本を開くと「平和は当たり前のものなのだろうか。」と、疑問文で始まった。

「日本は平和か？」とたずねられたら私は当たり前に「平和です。」と答える。だけど、なぜ平和なのかということは考えたことがなかった。

“なぜ戦争が起こるのだろうか”

読み進めてみると争いには必ず「対立」があると書かれていた。対立の原因は様々だけど、おたがいに自分の主張を押し通そうとすることで起きる。そして、これが国と国との場合、「戦争」が起こるのだと書いていた。一度戦争が起きると、憎しみ合って殺し合う。人の命が大切だということはだれもが知っていることなのに…「対立」と考えた時、それは私の家でもよく起こる。私とお母さん、お父さんとお母さん、私とお兄ちゃん。ささいな事でも言いたいことをおたがい言って、意見をぶつけ合っている。私の学校ではどうだろう。友達と先生、友達と友達、自分の意見を主張して相手の話を聞こうとしないことで、けんか＝小さな戦争が生まれている。学校はまったくちがう立場の人がたくさん集まるので、家よりももっと相手の話を聞く、相手を理解しようとする、相手に寄りそう、そんな気持ちが大切なんだと知った。

私は道徳の授業が大っきらいだ。「楽しくない、そんなことはわかってるよ！ああ、意見書かなあかん…早く授業終われー。」といつも思っている。だけど今ある平和は長い時間をかけて人が作り出してきたものだと思うと、そんなことを思っていた自分が少し恥ずかしく思えた。平和は当たり前なのではなくて、積み重ねてきたものだということ。「道徳」の授業や学校で、「思いやり」を持つことや「相手を思う気持ち」というのを教えてもらって、それぞれが学んで今があるのだ

という事。「平和」を守るのは政治家ではなくて世界中の一人ひとりなんだという事。そんなことを知った私は戦争を怖がっているだけではダメだと思った。できることから少しずつ実行していこうと思った。友達や人の話をきちんと聞こう！自分の意見をきちんと伝えよう！協力してお互いが納得できる答えを出していこう！困っている人を助けよう！
もうすぐ修学旅行だ。平和な未来をつくるために被爆者さんの話を聞いて心に留め、つないでいこうと思った。

小学校高学年 優秀賞

「戦後八十年をむかえて」

第二小学校 6年 鳴神 惟さん

今年は戦後八十年。テレビや新聞で戦争のことを報道しているのをよく見かけたり、学校で平和学習をしたりして私は戦時中日本の動物の暮らしはどうだったのだろうと考えました。そこでインターネットなどで調べてみると戦争末期になると国に供出させられることもあると知りおどろきました。そんな中私は低学年の時に読んだ「かわいそうなぞう」を思い出しもう一度読みました。この本は上野動物園のぞうが戦争により殺されてしまうお話です。爆弾が動物園に落ちおりがこわれてもうじゅうたちが暴れ出さないようにするためです。ジョンというぞうは毒を使う方法は失敗し、食べ物を与えられずうえて死んでしまいました。次にトンキー・ワンリーの二頭も食べ物を与えられずやせ細っていききました。しかし飼育員さんはがまんできずにえさと水を与えたが死んでしまいました。そして他の飼育員さんと悲しみました。

この本を読み終わり一番心に残ったことは飼育員さんががまんできずにえさを与えたことです。このとき飼育員さんはどれほどつらかっただろうと思いました。低学年でこの本を読んだ時はぞうの死んでいく姿を想像していてぞうさんかわいそうだなと思っていましたが、今はぞうだけでなく飼育員さんもかわいそうだと思うようになりました。

このように戦争はみんなが傷つくので戦争は絶対にしてはいけないと改めて考えました。現在でもたくさんの国で戦争が続いています。ウクライナなどでは飼い主とはなればなれになったペットや、ひなんするため仕方なくおいていかないとけなくなったペットがたくさんいると知りました。私はペットを飼っていませんがきっと飼い主はとてもつらいと思います。こんなひさんが起きるのが戦争です。戦時中では人が死ぬことが当たり前だったそうですが今となっては日本ではありえないことです。日本は戦後、戦争がもう二度と起きないように働きかけてきました。だから、今日本には平和があるのです。では世界はどうすれば平和になるのでしょうか。正解はわからないけど一人一人が戦争について知り考えることが必要だと思います。この「かわいそうなぞう」を読むだけでもたくさんのことを考えられるので世界の人に知ってほしいです。ゆいいつの被爆国である日本が世界に語りかけていく必要があるのではないのでしょうか。私はこの節目節目を大切に世界が平和になってほしいです。

小学校高学年 優秀賞

「僕の色、見つけた！」

日根野小学校 6年 古川 葵さん

志津栄子さんの「僕の色、見つけた！」を読み終え、胸にじんわりと温かいものが広がりました。この物語は、色覚障がいを持つ少年、信太朗が、自身の「見え方」と向き合い、やがてそれを個性として受け入れていくまでの成長を描いています。読み進めるうちに、誰もが抱える「自分らしさ」への葛藤と、それを乗り越えた先にある輝きについて深く考えさせられました。

主人公の信太朗は、周りの友達とは異なる色の見え方に気づきながらも、そのことを誰にも言えず、ひたすら隠して生きていました。特に印象的だったのは、絵を描く授業でのエピソードです。唇を茶色に塗ってしまい、友達に笑われた彼の心の傷は、私自身の幼い頃の記憶と重なり、胸が締め付けられるようでした。自分の「違い」が露呈する恐怖や、人と同じでありたいと願う気持ちは、子どもだけではなく、大人にとっても普遍的な感情ではないでしょうか。しかし、信太朗の物語は、悲しみだけで終わりません。新しい担任の先生や、温かいクラスメイト、そして家族の支えが、彼の閉ざされていた心に少しずつ光を灯していきます。特に、先生が信太朗の「見え方」を理解しようと努め、彼が安心して自分を表現できる場を与えてくれたことは単に障がいを理解するということ以上の、相手の存在そのものを肯定するというメッセージのように感じられました。

物語の中で、信太朗がゴッホの「星月夜」と出会う場面は、まさに彼の転機でした。ゴッホの絵が、彼に「自分にしか見えない色がある」と気づきを与え、それが絵を描くことへの情熱を再び呼び起こすきっかけとなるのです。人と同じように見えないことは、決して「欠点」ではなく、むしろ自分だけの「個性」であり、世界をより豊かに見つめることができる特別な力なのだという発見は、読んでいる私の心にも強く響きました。信太朗が自分の「色」を受け入れ、それを武器に絵を描き始めた時、彼の絵はそれまでとは比べ物にならないほど生き生きとして見えました。それは彼が自分自身のすべてを受け入れた証拠であり、彼の内側からあふれる真の輝きだったように思います。この本は、色覚障がいという具体的なテーマを扱っていますが、その根底にあるのは、誰もが持つ「多様性」への肯定です。私たちは皆、それぞれ異なる個性や強み、そして弱みを持っています。信太朗のように、自分の違いを恐れずに受け入れそれを堂々と表現できたなら、私たちの世界はもっと色鮮やかになるでしょう。

「僕の色、見つけた！」は、ただ読むだけではなく、読み終えた後も深く心に残る一冊です。悩みを抱える私たちに、自分だけの「色」を見つけ、それを大切にすることの尊さを優しく教えてくれます。自分らしく生きる勇気を与えてくれる、力強いメッセージでした。

中学校 最優秀賞

「言葉の使い方」

第三中学校 1年 水野 志音さん

私たちは、知らず知らずのうちに「悪口」を言ってしまうことがある。何気なく口にした言葉で相手が嫌な気持ちになってしまったり、逆に誰かに悪口を言われて悲しい気持ちになったりすることがある。今回『人はなぜ悪口を言うのか』を読んで、改めて「人との関わり方」について、

深く考えさせられた。

この本は「悪口」というなかなか真正面からは考えることの少ないものを、問いかけながらわかりやすく解説している。悪口をただの「嫌いな人への文句」ではなく、人間関係の中でどう影響を与えるのかという点に注目しながら、心理的・社会的な面から考察されている点がとても印象的だった。特に心に残ったのは、「悪口にはグラデーションがある」という文だ。たとえば、冗談みたいに軽く言ったつもりの一言が、相手にとっては深く傷ついてしまう悪口になってしまうこともある。逆に、きつく言ったはずの言葉でも、相手には、ただの「忠告」のように聞こえたりする。このように、放った言葉の意味も受け取り方によって変わるということに、僕はハッとさせられた。

また、斎藤さんは「悪口を言うことは、時に自分を守る手段になる」と述べている。たとえば、集団の中で孤立しないように、誰かに同調して悪口を言ってしまうという場面は、特に学校生活の中で多く見られるかもしれない。しかし、それは本当に「自分を守ること」なのだろうか？ 逆に、自分自身を少しずつ傷つけてしまっているような気もする。僕はこの点について考えながら自分が過去に使った一言を思いだし、心が少し痛くなった。

読んでいく中で、斎藤さんは「悪口から自由になることが、自分自身の価値を高めることにつながる」とも述べていた。これは、僕の中でとても前向きで勇気をもらえる言葉だと思う。誰かの悪いところを探して否定するのではなく、良いところを見つけて認め合う関係こそが、私たちをよりよい人間関係へ導いてくれる。そのためには、まず自分自身が「悪口を言わない・流されない」という心を持ち、他人に対しても誠実にいることが大切なんだと感じた。さらに、悪口をなくすためには、相手と正直に話す「対話力」や、自分の気持ちをコントロールする「感情の扱い方」も大事だと、この本は教えてくれる。特に、怒りやイライラといった感情をどう処理するかという部分は、学校生活や家庭の中でもすぐに活かせる内容だと感じた。実際に、僕の学校では「非認知能力」について考える機会があった。授業の中でも「協調性」や「コントロール」という言葉をよく使うようになっている。なんとなくしかわかっていなかったものが、はっきりと理解することができた。悪口の根本は、「不満」や「嫉妬」といった感情があることが多く、それに気づいて冷静になることができたなら、もっと前向きな言葉を選ぶはずだろう。

この本を読み終えた今の自分は「言葉を選ぶ責任・使う責任」や「相手の気持ちを想像する大切さ」を強く意識するようになった。私たちは、言葉を使うことによって、人を笑顔にさせることもできれば、深く傷つけてしまうこともある。その「言葉」の力を知った上で、できる限り温かい言葉や優しい言葉、思いやりのある言葉を選んで使いたいと思った。

『人はなぜ悪口を言うのか』は、僕たち子どもだけでなく、大人にとっても大切なテーマを扱った本なんだなと思った。

悪口という身近なテーマを通して、人間関係や自分自身との向き合い方について学ぶことができた。僕は今後、どんな場であっても、言葉を大切にできる人でありたいと強く思う。これからは、友だちとの会話でも、相手がどんな気持ちになるかをもっと考えて、話していきたいと思う。そして、悪口を言いたくなったときには「今の自分はどんな気持ちなんだろう？」と、一度たちどまって自分の気持ちをもう一度深く考えてみたいと思う。少しずつでも、自分の言葉一つひとつに責任をもてる人として、これからたくさんの人と出会い、経験し、人を思いやることのできる大人になりたいと思う。

「証明しなくていいもの」

長南中学校 2年 富樂 藍羅さん

「赤毛証明」という本を読み終えたとき、私はしばらくページを閉じることができませんでした。なんだか胸の奥がじんわりして、「こんなにも、静かで強い物語があるんだ。」と思いました。

主人公の堀内めぐさんのかみは、光の当たり方によって赤っぽく見えることがあります。それだけで「かみを染めたのでは？」と疑われてしまいます。でも、めぐさんは染めてなんかいません。自然なかみの色なのに、大人たちは勝手に意味をつけ、「証明できるの？」と問いつめてきます。その場面を読んだとき、私はとても不思議で悲しい気持ちになりました。学校では、「ちゃんとしていること」を求められることがたくさんあります。服装、提出物、言葉づかい。もちろん大切なことだと思いますが「ちゃんとする」が「みんなと同じじゃないとダメ」という意味に変わってしまうことがある気がします。

めぐさんは何も悪いをことをしていないのに、「赤い髪は校則違反です」と言われます。

「証明できますか？」と聞かれて、自分の自然な一部が否定される。その場面は、私にも他人事とは思えませんでした。私自身も、まわりとちがうことで不安になったことがあります。誰かに理由を聞かれたらどうしよう、ちゃんと説明できるかな、と考えてしまったこともあります。

この物語で一番心に残ったのは、めぐさんが、「私は証明しない」と決めるところです。怒ったり反抗したりせず、静かに、自分の気持ちを守り抜く姿に強さを感じました。誰かに「あなたは白でしょ」と言われたからといって、自分が「黒だ」と、信じているものを変える必要はない。めぐさんはそれを行動で見せてくれました。でも、めぐさんが最初から強かったわけではありません。悩んだり、迷ったり、苦しんだりする姿がとてもリアルで、「私と似ているな」と思うところがたくさんありました。私も「みんなとちがうのは変なのかな」と思って不安になることがあります。だから、めぐさんの気持ちがよくわかりました。

物語の中で、めぐさんはある出来事をきっかけに、自分のかみの色について深く考えるようになります。周りの人たちの多くが黒かみである中、自分だけ赤毛であること。それはめぐさんにとって、小さな不安や疑問の種でした。けれども、その違いを証明しなくてもいいし、無理に理由を探さなくてもいいのだと気づかせてくれる人たちとの関りが、彼女の心を少しずつ変えていきます。「あなたのままでいい」という思いが、めぐさんの中に温かく広がっていく様子が読む私の心にも深く届きました。

この本を読んで、私は「わたしらしさ」について考えました。これまで私は、周りと同じところがあると、「どうして？」と聞かれないように、気をつけていたと思います。理由を求められないように、なるべく目立たないようにしてきました。でも、この本を通して、証明できないことでも、それは私の一部であり、無理に理由をつける必要はないのだと感じとれるようになりました。この物語は、大きな声で自分を主張しなくても、自分の中にある小さな誇りを守っていいのだと、そっと教えてくれます。「わたしだけの色」を信じていいのだと、めぐさんの姿が伝えてくれました。たとえそれが周りと同じがっても、それは間違いではない。そう思えるようになったのは、この本に出会えたからです。

読み進める中で、私はこれまでに振り返りました。人と違う意見を持ったとき、笑われたり変だと言われるのが怖くて、自分の色を隠してきました。でも、めぐさんが自分の髪の色を受け入れ、自分らしく生きようとする姿に大きな勇気をもらいました。

この本は、人と違うことは劣っているのではなく、その人だけの輝きだと教えてくれます。たとえ理解されなくても、自分が大事だと思えるなら、それは守るべき宝物です。めぐさんの強さを見て、私も自分の中に小さな光があると信じられるようになりました。この本に出会えたこと

で、迷ったときや自分を責めそうなときも、きっと前を向けるはずです。誰に理解されなくても、自分の色を大切に生きていきたいと思いました。

中学校 優秀賞

「自分を受け入れること」

長南中学校 3年 芝野 実咲さん

私は図書館で本を選んでいる時、「自分を好きになれない君へ」という題名が目にとまりました。中学生の私は、家族に対して素直になれなかったり、本当はこう想ってるのに、素直になれないせいで親とけんかになったり、そんな自分が好きになれませんでした。なのでこの本を読んでみたのです。

この本の作者は、高校時代から大学一年生まで、友だちと話すと緊張する、顔が引きつる、声がうわずってしまうなどの症状に苦しんだそうです。本当はたくさん友だちと話したいのに逃げてしまう、そんな自分がきらいで孤独を感じていたとき、ある本と出会い、そこには「対人恐怖症」と書かれていたのです。それを見た作者は、自分と全く同じ症状で「自分だけじゃなかったんだ」と安心したそうです。それからこの病気を改善するために努力を重ねた結果、彼は地獄のような4年間から抜け出すことができたのです。そして、同じことで悩んでいた後輩から相談を受け、そこで初めて自分が「対人恐怖症」だったことをカミングアウトしました。すると、後輩は「自分だけだと思っていました。安心して勇気が湧いてきました。」と彼に伝えました。彼は今まで、昔の自分を隠して生きてきましたが、これを機に自分の病気を知られたからと言って何か自分に起こるというわけではなく、むしろ人の励ましになることもあると気づいたのです。それに気づいたことで、今までいやでたまらなかった自分の姿を見つめるようになったのです。

私はこの話を読んで、価値観が変わりました。私は今まで精神的な症状に悩んでいる人達が自分の病名を知り、安心するということを考えたことがなかったからです。でも、自分だけだと思って孤独を感じているとき、自分だけじゃないんだと思うと確かに少し気が楽になるなと思います。そうなることで、少しずつ自分を受け入れていけるのではないかと考えました。自分を受け入れるということはとても大切でとても難しいことです。作者は、過去の自分がいたからこそ、今の自分がいると言っています。本当にその通りだと思います。たとえばどんなに辛いことがあったとしても、自分のことを一番分かっているのは自分自身なので、他人と比べる前に、自分と向き合うことが大切なのではないかと私は考えます。作者が後輩の相談に対して、カミングアウトできたことにもつながっていると思います。もし私が作者の立場だったら、昔の自分をなかったことにするかのように隠し通すと思います。それも一つの方法かもしれませんが、カミングアウトをすることで、自分のことを理解して他人に伝えるという人としてより成長する鍵を手に入れることができると思います。作者はそこで手に入れた鍵を存分に使いこなしていると思います。自分と同じ経験をしている人に対して、自分が楽になった方法で、寄り添っていく。この作者の行動力に私はおどろき、彼をすごく尊敬しています。

私はこの本を通して、自分を受け入れる大切さに気づかされました。これから先の長い人生の中で、自分自身を受け入れられなくなって苦しむ時期や大きな壁にぶつかることがあるなと思います。そんなとき、この本を思い出したいです。本当に苦しんでいるときに、無理して受け入れようとするのではなく、少しずつ自分自身と向き合って、最終的には、「あの辛かった時期があって良かったな」と思えることが、自分を受け入れたことになると思います。この考え方を忘れずに生きていきたいです。辛い経験は、巨大な壁であり、大きなチャンスでもあるとこの本を通して感じました。勇気があることかもしれませんが、苦しい時は誰かに相談すること、自分自身を見

つめること、これらを胸に生きていきたいです。辛いときこそ、作者のように明るい未来に向かって少しずつ前進していく、そんな姿勢を忘れず、これからの進路を決めていく年齢として自身と共に物事を進めていこうと思います。
